



耐病性が優れ、倒れにくい、安定生産が可能な 新規需要米向き新品種「あきいいな」

暖地水田輪作研究領域
(現所属 作物研究部門)
黒木 慎 (くろき まこと)

はじめに

主食用米の国内需要量は、近年10万トン/年のペースで減少しています。このような傾向の中で、わが国の食糧生産の基盤である水田を守るために、コメの利用の多角化（新規需要米：米粉用・飼料用等）が図られてきました。

新規需要米の生産にあたっては、外国稲などから多収性を導入した品種が「多収品種」として選定され、その作付けが推進されています。「多収品種」は一般品種より収量性が高いため、収量当たりの生産コストが低減できます。その一方で、肥料の過度な投入により、病虫害や倒伏の発生が増加することが知られており、収量の減少や病虫害防除コストの増加、作業効率の低下が問題となることがあります。そこで、2023年に、耐病性が優れ、倒れにくい多収の新品種「あきいいな」を育成しました。

「あきいいな」の特性

水稻の主要な病害である、いもち病に対する「あきいいな」のほ場抵抗性は、葉いもち“かなり強”、穂いもち“やや強”です（表）。また、縞葉枯病には“抵抗性”です。耐倒伏性は“やや強”です（表）。

多肥条件における粗玄米重は669kg/10aで、九州の主要な主食用米品種である「ヒノヒカリ」より約20%多いです（表）。

九州北部において普通期栽培をした場合、出穂期、成熟期は「ヒノヒカリ」とほぼ同様のため、「ヒノヒカリ」と同じく温暖地の平坦部および暖地での栽培に適しています。

「あきいいな」の普及に向けて

「あきいいな」は、2024年産から「多収品種」に選定され、飼料用米生産に利用する際には、一般品種よりも手厚い助成が受けられます。2024年産から山口県内で普及が始まっているほか、関東～九州の6県8カ所で奨励品種決定調査に供試されており、さらなる普及拡大が期待されます。

▼ 表 移植栽培における品種特性の比較

品種名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	粗玄米重 (kg/10a)	同左 比較比率	耐病性			耐倒伏性
					葉いもち ほ場抵抗性	穂いもち ほ場抵抗性	縞葉枯病	
あきいいな	8. 21	10. 19	669	119	かなり強	やや強	抵抗性	やや強
ホシオバ	8. 22	10. 25	710	127	不明	不明	抵抗性	やや強
ヒノヒカリ	8. 24	10. 17	561	100	やや弱	やや弱	罹病性	やや弱

注) 栽培地 : 福岡県筑後市
栽培年 : 2017～18年および2020～22年
栽培条件: 播種 5月17～26日, 移植 6月18～21日
施肥 緩効性化成肥料をN, P, K各12kg/10a施用, 全量基肥
栽植 30cm×16cm, 20.8株/m², 1株3個体
比較比率: 「ヒノヒカリ」の粗玄米重を100としたときの各品種の比率。
倒伏程度: 無 (0) ～ 甚 (5) の達観評価。
「あきいいな」はいもち病ほ場抵抗性遺伝子Pi39を有し、いもち病菌の系統（レース）変動の影響を受けにくく、安定したいもち病抵抗性を示すことが期待されます。
代表的な多収品種「ホシオバ」のいもち病抵抗性は特定のいもち病菌のレースのみの感染を阻止する抵抗性に由来します。そのため、抵抗性のないレースがまん延するといもち病に感染してしまう例が報告されています。



▲ 図 「あきいいな」の株標本
注) 左から「あきいいな」,
「ホシオバ」, 「ヒノヒカリ」